

アフガニスタンにおけるタリバン支配体制誕生の理由

背後に文化パシュトゥーンワリーがあるのか

円 城 由 美 子

Reasons for the Birth of the Taliban Rule Regime in Afghanistan Is Pashtunwali behind it?

Yumiko Enjo

抄 録

アフガニスタンから2021年8月欧米の軍が撤退し、タリバン暫定政権が始まった。2年以上経過したがタリバンは如何なる統治を実施しているのか。「女性差別」が叫ばれ、国際社会からは認められず、国内は貧困に苛まれているが、統治に関する公平かつ正確な情報入手は困難であり、分析は難しい。暫定政権がいつまで暫定なのかも依然はっきりしない。そこで1994年に「突如」姿を現したタリバンの台頭さらに思想の根源らしきものを新たな視点から考察したい。これまでの分析を確認した上で、一時的にせよタリバンに住民たちから称賛が集まった理由を、文化人類学的な視点から分析を試み、そこから視野を広げて新たな方向性から現タリバン支配を再考する。

キーワード：アフガニスタン、タリバン、パシュトゥーン、パシュトゥーンワリー

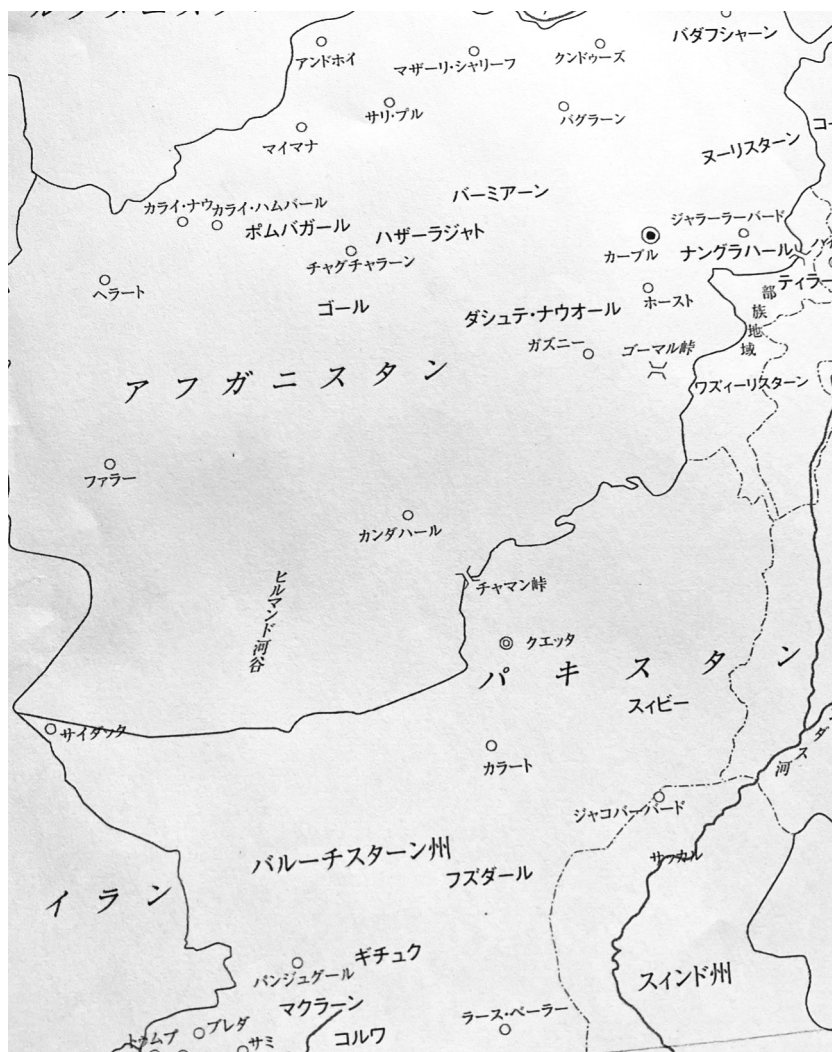
(2023年8月5日受理)

Abstract

In August 2021, Western-led forces withdrew from Afghanistan, and the Taliban took over as the interim government. It is difficult to gain the fair and accurate data to report and analyze the governance in the country, where discrimination against women has been voiced, the international community does not recognize the Taliban's rule, and the country is still suffering from poverty. It remains unclear how long the interim government will remain in power. This paper would like to analyze the rise of the Taliban, which "suddenly" appeared in 1994, and what seems to be the root of its ideology from a new perspective. Therefore, this paper will reconfirm the movements that have been studied, analyze the reasons why the Taliban was admired, even if temporarily, by the local population, incorporating a cultural anthropological perspective, and from there broaden the perspective to reconsider the current Taliban rule from a new direction.

Keywords: Afghanistan, Taliban, Pashtun, Pashtunwali

(Received August 5, 2023)



アフガニスタンおよびパキスタン周辺地図

出典：前田耕作、山根聡（2021）『アフガニスタン史』（p 13）。

はじめに——タリバン誕生

2021年8月に、アフガニスタンから欧米軍が撤退し、タリバンによる暫定政権が始まった。本論文では、そのタリバンに焦点をあて、いかにしてタリバンが台頭したのか、その要因を探る。その際には、タリバンという組織について、誰がつくり、どのように内戦に参加したのか、その時にアフガニスタンの諸都市はいかなる状況であったのかについても

改めて確認する。アフガニスタンとはどのような土地であるのか、そのような土地でタリバンが受け入れられた理由とは何であるのか。政治的な分析はもちろん必要であるが、それ以外の側面である民族の分布や宗教および当地の文化についても視線を向け、タリバンの主張するイスラームとの関係を探りたい。

1. 先行研究

タリバン誕生について比較的詳しく記述されている文献には最近のものでは青木健太の『タリバン台頭——混迷のアフガニスタン現代史』（2022）がある。タリバン生成の背景から米国との紛争、さらに社会への影響が記載されている。ほかにもパキスタンとの関係を重視している多谷千香子の『アフガン・対テロ戦争の研究』（2016）、とりわけアフガニスタンが経験してきた紛争を重視しているラリー・P・グッドソンの『アフガニスタン：終わりなき争乱の国』（2001：沢田博訳）など、文献は多い。しかし1994年のタリバン台頭については、「ほとんど謎の部分が多い」（グッドソン：167）、「彗星のように突然現れた」（多谷：131）など、不明とされている文献が少なくない。そのような中でタリバンの成り立ちはなぜそんなにわかりにくいのか。グッドソンはほとんどは謎としながらも、考えられる要素を5つ述べている。しかし、彼の5要素だけではなぜ、タリバンが短期間に多くの土地を支配するに至ったのかの説明はなされていない。

この点についてイスラーム法学者の中田考はタリバンに参加している人々の宗教性に、さらに、イスラーム研究者の内藤正典については経済的問題にも注目し、また文化的な要因を示唆している。本論文では、とりわけタリバンが米国を撤退させた2021年を中心にとらえながら、タリバンが短期間にアフガニスタン統治の座についた理由を検討する。

この目的のために、とりわけタリバンが示している「イスラーム」とはどのようなものであるのかという視点からタリバンを理解する姿勢が必要不可欠である。そのため、その統治実現の過程を探る際に中田考の分析による「イスラームの視点からの思考」を検討する。その際には、これまで体制の動きは政治的分析が中心だったため見落とされていた文化的側面をも新たに取り上げ、文化人類学者松井健による「パシュトゥーン人」も考察に加えて、タリバンとは何者であるのかを分析する。

2. タリバンとは誰なのか

1994年10月に突然現れたとされるタリバンだが、彼らは誰なのか、どのような人々から作られている組織で、なぜ現在もアフガニスタンを支配できているのかを考察する。

1) アフガニスタンは当時どのような状況だったのか

当時のアフガニスタンは、ソ連軍撤退後の統治者ナジブラの政権が崩壊し、その後、あらゆる集団が統治者を競い合う状態になっていた。「聖戦」を挙げてソ連と戦っていたム

ジャヒディーンたちは、その後は国家を守るのではなく、国を支配するポジションを競い合う複数の集団となっていた。民族、宗派、軍事力など様々な要素を基本とし、分裂し、それぞれが拠点を構えた。内戦を戦っている彼らはもはやムジャヒディーンではないとされ、それぞれの集団は、その集団をまとめる軍閥と呼ばれる支配者によってまとめられるようになっていた。

主に首都カブールおよびその周辺はラバニ大統領つまり政権軍がタジク人を中心に支配しており、また、西部ヘラートを中心にイスマイル・ハン、中央部はハズラ人、南部はパシュトーン人が支配していたが、何十もの軍閥に分かれていた。強盗集団と区別するのが難しい集団も少なくなかったとされる。

ソ連戦ではほとんど損傷のなかった首都カブールだが、ナジブラ政権からその後のムジャヒディーン同士の戦いである内戦で市街の居住地の多くが破壊された。同市の3分の2ほどが廃墟となった。さらに、軍閥によって多くの箇所に「検問所」を設けている。当然のように銃を構えた複数の兵が構えており、市民はそのポイントを通るたびに「通行税」を払わされた。あらゆるものの争奪戦のようで、性被害もあり、新たな難民がカンダハールからパキスタンのクエッタへと脱出していたのがこの時期だった（ラシッド：53）。

2) 元国連大使の見方

この時期のアフガニスタンについて元国連大使の高橋博史は以下のように記している。

「さながら戦国大名が割拠するごとく国土が乱れた。… 長期間にわたる戦乱で民衆は極度に疲弊し、ムジャヒディーンに対する期待を失った。権力闘争の激化は目を覆うばかりだった。とくに南部のカンダハール地方においては、かつてのムジャヒディーン指揮官は匪賊と化し、誘拐・略奪といった暴虐が日常的に頻発していた」（2021：596-597）。

3) どんな人たちなのか

タリバンの指導者ムハンマド・オマルは、南部カンダハール出身である。彼自身、南部の都市カンダハール近郊の村で神学生であったとされる。彼は右目を失っているが、それはナジブラ政権との戦いによるものだという¹。また、タリバン幹部ハッサン・レーマニはカンダハールの州知事であり、旧ソ連軍と戦った数少ないタリバンのメンバーの一人である（ラシッド：45）。オマルとハッサン、ガウス、モハメド・ラバニは知り合いで、南部アフガニスタンの都市カンダハールから約200キロメートル離れたパキスタンの都市クエッタにあるマドラサに通っていたとされている。マドラサとは、アラビア語でイスラーム世界の高等教育機関「学院」と呼ばれる学校を指す。

その後、同郷²のハーン・アブドル・ハキム指揮官の元に身を寄せ、ナジブッラー政権が崩壊するころまで、聖戦に従事していた³。その後、仲間数人とハーンから離れ、モスク管理を依頼されたため、そこでモスク管理をしながら説教師として勤め始めた。

4) 荒廃したカブール

しかし、先に述べた通り、その後アフガニスタン国内では内戦となり、イスラーム各集団、もしくは民族同士での戦いとなった。それは、集団対集団の争いだけでなく、人々が住み生活する場所と空間を破壊した。カブールの荒廃ぶりは酷かった。物品は奪われ、住宅は破壊され、女性は性被害を含む暴力を受けたのである。

1992年11月高橋元国連大使が日本へ帰る前の出張としてアフガニスタンのカブールを国際赤十字のセスナ機で訪れた際の様子を描写している。

「日本の戦国時代と同じく、全国各地でムジャヒディーン各派の野戦指揮官⁴ (= 軍閥) たちが陣取り合戦を繰り広げていた。アフガン国内の道路は、それぞれの地域を根城にする各派の野戦指導官がコントロールしていた。野戦指揮官たちは勝手に道路を封鎖して、鎖や綱を渡しただけの簡易な私的関所を設置した。その関所にはカラシニコフ…を持ったムジャヒディーンが立っていた。頭にはパコールという帽子やターバンを巻き、民族衣装をまとっていた」「彼らは通行する人や車に銃口を突きつけ、通行料として金品を巻き上げていた」(2021:110)

また、これ以外にも、地雷がそこそこに埋められており、道路を外れた走行は危険であることや、老女や女子供も見境なく金品は奪われ、子供を奪われるなど、民族に関係なく行われていたことが述べられている。

カブールでは、「ムジャヒディーン各派による陣取り合戦が繰り広げられる首都の姿」(2021:112)を高橋元国連大使は目撃している。そこに残っている人たちは、外国へ逃げ出すことができないほど貧しかったのである。これが内戦下のアフガニスタンの首都カブールであり、そこに在住するアフガニスタン住民は戦火のたびに右往左往し、モスクや学校に避難するより他なかったのである。

高橋元国連大使は「市民の心の荒廃が恐ろしいほど進んでいることを実感した」(2021:113)とも述べている。精神の乱れや心の乱れが多々見られたのだと考えられる。つまり、カブールは戦場と化し、もはや人の住めるような場所ではなかったと考えられる。そのようなカブールの惨状は、アフガニスタン第2の都市とされる、南部のカンダハールにまで波及していった。

5) パキスタン・カエッタのマドラサ：世直し僧兵集団タリバンへの変化

カブールの争いの様子は、1年ほどするとパキスタンにあるマドラサで学ぶ現タリバン戦士たちにも伝わっていた。

創設当時のタリバンは、反ソ聖戦に参加したムジャヒディーンの子供たちだという(ラシッド:56)。ウマルたちが設立したマドラサにも、わずか数か月で少しずつながら学生は増加していった。戦況被害を見聞きしながら当初ほど影響は酷くないかもしれないと考えた村から離れて一旦は避難していた住人の中から、帰村する人が徐々に増えていたからで

ある。

彼らの多くはパキスタンにある難民キャンプで生まれ、人生のほぼすべてをキャンプで過ごしていた。パキスタンにあるマドラサで居住空間も与えられ教育を提供されていた。当初のマドラサの卒業生は十数歳から二十歳そこそこの若者である。反ソ聖戦のムジャヒディーンに加わり、イスラームを守ることを目的としていた。

彼らの多くはそれまでアフガニスタンで居住したことはなく、隣国から想像するアフガニスタンはイスラームの兵士として「守るべき故郷」なのであった。アフガニスタンとは、多くのタリバン兵士にとっては行ったことも居住したこともない、しかし「守るべき故郷」であるとされ続けた土地なのである。

イスラームを守る、これが当初の目的ではあった。しかし、アフガニスタンに戻ってみれば、カブールはじめ多くの地域で暴力が起き、荒んでいた。この荒み具合こそがタリバンに、外に向かって動くための明確な目的を与えたと考えられる。この無秩序状態を終わらせ、同時にアフガニスタンの宗教や文化を純粋なイスラームの国として作り直すことを目指した(Barfield: 255)のである。あまりに乱れたアフガニスタンを正そうという「世直し」の僧兵集団になったのである。これが設立当初のタリバンが目指したものということになる。

3. パキスタンの支援協力の在り方

ここで隣接し、また多くのアフガニスタン難民を抱えるパキスタンについて、政府によるアフガニスタンへの支援を中心に考察する。

パキスタンの介入

国家としてのパキスタンには Inter-Service Intelligence (三軍統合情報機関: 以下 ISI) という情報機関がある⁵。この機構は紛争という点で長年アフガニスタンと関わりを持っている。組織が本格的に、もしくは厳しくスパイ活動を行ったのはソ連戦である。ISI は、ソ連のアフガニスタン侵攻が行われると、ISI にアフガン局を設置し、アフガン政策を担わせ、CIA やサウジ情報局から流れてきた資金を組織や武器などに分配した。(2016 多谷: 122-123)

パキスタンは、ソ連戦の際にアフガニスタン人反政府イスラーム武装勢力を7つのグループに分割し、いわゆる「ベシャワール7」を組織した。資金や武器の分配はすべてベシャワール7によってされ、イスラーム以外のムジャヒディーンは、アフガニスタン国内随所に存在する「ギャング」と言われる武装集団たちから配分を受けなければならなかったのである。パキスタンから戦争に参加した戦士たちも同じであった。後にタリバンのリーダーとなるオマルも、「ベシャワール7」の一つであるイスラーム党のハリス (Khalis)⁶のグループに入っていた。

このことが関係しているのだろう。以下のように説明している文献もある。

「もともとタリバンは、パキスタン陸軍の ISI という諜報機関が、ソビエト軍の進駐に対抗するために、パキスタン側の部族地域のパシュトゥーン人のイスラーム神学生に資金援助をし、武器を与えて軍事訓練をしてアフガニスタンに送り込んだのが起源になっているといわれている」（松井 2011：473）

また、当時力を持ち始めていたヘクマティヤルとラバニ勢力という「ベジャワール 7」同士の戦いは続き、ISI は別に支援する集団を探し始めていたと説明している文献もある（多谷 2016：130）。ISI がタリバンを本格的に支援し始めたのは 1994 年 9 月ごろであるとされているが、そうであれば、少なくとも何等かの形によるパキスタン側の——主に ISI の——支援によって、タリバンの支配力が拡大していったと考えるのが妥当であろう。

4. タリバン支配の拡大

パキスタンからの支援はあり、パキスタンでの兵役練習もあり、人員もパキスタンからの増員もあったのだろう。表面ではまだ活動は目立たず報じられずだったが、その「時」までタリバンは「力」をつけ続けていたのだろう。しかし、どのようにしてなのか。タリバンはどのようにして勢力を拡大し全土を支配するに至ったのだろうか。ここで確認する。

1) いかに支配を広げたのか

もともとタリバン中枢メンバーが宗教教育を受けたマドラサはパキスタン国内の北西部辺境州（NWFP）や連邦直轄部族地域（FATA）⁷ などである。タリバンにはアフガニスタン難民が多いとはいえ、パキスタン人学生も加わっていた。幼いころから寝食を共にし、祈りを捧げた同門の弟子がそのまま僧兵となったのである。

マドラサの多くは保守的なイスラーム教の政治組織ウレマー・イスラム協会と関係がある、もしくは協会が運営していた（グッドソン 2001：169）。タリバンがイスラーム原理主義と公言しているのはそのためであろう。

2) 勝ち得た要因とされていること

タリバンは極めて短期間のうちにアフガニスタンのほぼ全土を掌握した、というように言われている。しかし、前述のようにこの詳細な方法もしくは理由については多く語られていない。これまでソ連も撤退を余技なく、他の複数のムジャヒディーン諸政党もしくはグループも長期統治は不可能だったにもかかわらず、なぜタリバンは、「統治」が可能だったのだろうか。

このように不明とされることの多いタリバン統治についてアフガニスタン研究の第一人者の一人であるグッドソンは 5 つの主だった要因をあげている（グッドソン：171-174）。

- ① パシュトゥーン人：1 つ目は、彼ら自身が収めた地域の居住者は、彼らと同じ民族つまりパシュトゥーン人であったということである。1998 年にタリバンは北部

と中部でようやく軍事的に勝利したが、それまでに支配していた南東部は概ねパシュトゥーン人優勢の地域であった。タリバンが支配できなかったところは——西部ヘラートとカブールの一部を除けば——少数民族が住んでいたところだった⁸。

- ② 宗教的厳格さ：タリバンは当初から一貫して自分たちの運動を「原理主義である」と説いていた。このことに、とりわけアフガニスタンの田舎に住む保守派のパシュトゥーン人は惹きつけられた。タリバン内の腐敗も——このころは——少なかった。
- ③ アフガニスタン人の戦争疲労：ソ連の侵攻から15年以上もの間、紛争状態は継続的に市民生活を脅し続けていた。国際赤十字委員会の当地派遣団ピーター・ストッカー代表は1994年10月その状況について「カブールの一部地域での生活は、今や地獄と化している」と説明し、やがて訪れる冬について「恐るべき状態」であると認めた。赤十字委員会によると、多くのカブールの家や建物は崩れ、同年1月からの半年ほどだけで4000人が死亡1000人以上が負傷、50万人以上が難民化しているとのことである⁹。
- ④ 資金：複数の研究者が報告しているが、タリバンは金を使って戦闘せずに占領地を拡大した。つまり、敵方の司令官を味方につけたり、降伏させるのに金を使ったとされている。買収である。そのため、タリバンが進軍する前に必ず相当な額が用意され、敵方の司令官に渡された。その出所はサウジアラビアや他のペルシャ湾岸諸国、または運送マフィアやヘロインの密輸業者、ウサマ・ビン・ラディン、パキスタン政府と言われている。また、タリバン運動の初期のころにはヘロイン税をふくめた関税も主な歳入であった（グッドソン：172）。金で敵が寝返って「タリバンの征服」となったため、タリバンは1995年4月にカブールで敗戦するまで、本格的に戦闘を行うことはなかった。
- ⑤ パキスタンの支援：パキスタン政府、社会、軍による支援は重層的で深いとされている。パキスタン政府は認めていないし、タリバンもすべてに従うわけではない。しかし、タリバンがパキスタン系の軍隊であるのは間違いない。パキスタン内でタリバン兵が軍事訓練を行うことや、パキスタン軍が実践に加わることで多様に行われていた。1998年の北部におけるタリバンの勝利はパキスタンからの軍事支援があったおかげである、とされている。

3) イスラーム学ネットワークからの議論

イスラーム法学者である中田考は、パキスタンの支援について認めながら、同時にイス

ラーム学校のネットワークについて、以下のよう強調している。

「タリバンはパキスタン人の神学生が加わっていただけでなく、パキスタン軍から軍事訓練も受けていた。……初期のタリバンがパキスタンのアフガン難民キャンプの出身者でありイスラーム学のネットワーク、パシュトゥーン人のネットワークなどを通じて軍事支援を含めた様々なパキスタンの支援なしには存在しなかったことは事実である」(2021：89-90)

創設当時のタリバンは、反ソ聖戦に参加したムジャヒディーンの子供たち（ラシッド：56）と認識されている。彼らの多くはパキスタンの難民キャンプで生まれ、人生のすべてをそこで過ごし、パキスタンにあるマドラサで居住空間も与えられ教育を提供された。当初のマドラサの卒業生は二十歳そこそこの若者で反ソ聖戦のムジャヒディーンに加わり、イスラームを守ることを目的としていた。彼らはそれまでアフガニスタンで居住したことはなかった。彼らにとってアフガニスタンとは隣国から想像し続けた故郷であり、イスラームの兵士として「守るべき故郷」だった。

このようにタリバンがパキスタンから支援を受け、さらにパキスタンに居住はしていたのは事実である。しかし、タリバンとパキスタンは完全なる一味徒党ではなかった。タリバンとパキスタンとの関係について中田は、パキスタンとの国境ラインについてはタリバンが認めるのを拒否していることや、パキスタン政府に対して「パキスタン・タリバン」¹⁰の取り締まりを求めていることなどを挙げて、タリバンはパキスタンの傀儡政権ではないことは明らかであると指摘している。

短期間のうちにタリバンが勢力を拡大した理由はほかにもあると考えられる。鍵は、タリバンを構成していたメンバーの変容である、と中田は述べている。結成当初の1994年には戦う僧兵集団であったタリバンはまさしく神学生集団であった。しかし1996年にカブールを無血占領し、イスラーム首長国を樹立した後は「神学生だけでなく、一般の民衆から……参加するものが大量に生まれる。彼ら「新参者」たちはタリバン創設メンバーのような古参の幹部と異なり、「タリバン（神学生集団）」ではない」と中田は言い切っている(2021：86)。

つまり、短期間のうちにタリバンが、1996年に戦闘をすることもなく支配する土地を拡大できたのは、グッドソンの述べているように、同胞であるパシュトゥーン人地域を中心に支配していたこと、少なくとも当初はタリバンがイスラームについて厳格であったこと、人々が戦争に対して嫌悪感をもっていたこと、資金援助によって明らかに領地の支配者を買収して傘下に入れることができたこと、さらにパキスタンによる支援があったこと、という5つの要因が間違いなく考えられる。ただし、その後次々と勢力を拡大できたのは中田のいうように、神学生だけでなく一般民衆からタリバンのメンバーになりたいという人を次々と入れることができたからであることが大いに考えられる。

5. 新たな視点：パシュトゥーン文化の土着性とイスラームへの影響

ここで、グッドソンが1、2にあげていたパシュトゥーン人という点について、文化面からさらに掘り下げてみたい。

1) パシュトゥーンワリー

そもそも多民族多宗派を抱えるアフガニスタンで、パシュトゥーン対非パシュトゥーンの対立は少なくともソ連がアフガニスタンから撤退して以来30年という長期にわたって継続していたと考えられる。

パシュトゥーン人の文化については、単純に保守的であり、それゆえにタリバンの言動に近い、というだけではない、それ以上のものがあつたのである。それは、パシュトゥーンワリーと呼ばれる生活規範であり社会倫理でもある。これについては、文化人類学者の松井健による説明が詳しい。松井はアフガニスタンをはじめとする砂漠文化を中心とした地域に関する書籍を出しているが、その中の複数の章でアフガニスタン紛争の「文化的要因」に関連した内容を取り上げている。

以下はパシュトゥーンワリーの主な内容の抜粋である。

表1 パシュトゥーンワリー概要

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 外部からの客人を歓待する。そのためにゲスト・ハウスを備えている。2. 血讐（バダル）をおこなう。近親者を殺されたときには、必ず加害者を殺す。3. 保護を求めて避難してきたものは、自分の生命をかけても守る。ただし、黒(トル) (第5項で規定)は除く。4. 名誉（ナング）を守る。5. 不義私通（を犯したものは黒(トル)と呼ばれ、当事者の死によって白(スピーーン)に戻される。6. 父方平行イトコ（タルブール）とは競争・ライバル関係にある。タルブールは敵という意味にさえる。 |
|---|

出典：松井（2011）p 417 より抜粋。

また、松井はパシュトゥーン人の間では、女性の貞淑についての噂は男性の名誉にかかわるとされ、娘がふしだらと言われると父親が娘を殺さなければならなくなることさえあり、またこのような殺人を行うことによるのみ、男性の名誉が守られるとされるとまで指摘している。パシュトゥーン人は、このパシュトゥーンワリーを行うことを名誉なことであるとしているのである。

2) パシュトゥーンワリーなのかイスラーム法なのか

さらに、どこまでがイスラーム法でどこからがパシュトゥーンワリーによる規律なのか、アフガニスタン南部を中心とするパシュトゥーン人の在在地域では、両者が個々人の中で融合してしまい、往々にして同一視されている。つまりパシュトゥーンワリーは「イスラーム法が生活世界に融合するようにかたちをなしたものだ」と認識されている」（2011: 486）というのである。

また、アフガニスタンとりわけ地方のパシュトゥーン人居住地域ではタリバン支配以前から女性が外でヴェールをかぶらずにいることは基本的にはなかったという。しかしアフガニスタンがタリバンによって支配され、パシュトゥーン人居住地域で、もしくは首都カブールでも女性が常にヴェールを着ていることを認識した多くの西側諸国の研究者、政治家、さらには一般の人々は、「抑圧」と位置付けている。それは真の抑圧なのかどうかは、確認されていないし、確認するのは困難なことではある。

3) 地元では何がどう受け止められているのか

この様子については、イギリス人ジャーナリストのグリフィンが『誰がタリバンを育てたか』でタリバンがカブール市民に対して「特異なイスラーム的儀礼を押し付けよう」としていたと記し、また西部ヘラートで最初に出された布告は「女性の権利とタリバン式公衆道徳観念に焦点を絞った」ものである（2001, 9）と説明し、「南部パシュトゥーン人民居住地域の風習をそのまま持ち込んだものだった」と、締めくくっている（2001, 10）。しかし、この文章は、もともと英文で書かれているものだが、その地域のとりわけ女性に関する文化をそのまま他地域に押し付けるものだった、と訳出し直すことができるだろう。

ここで鍵となるのはグリフィンが「特異なイスラーム的儀礼」や「風習」と述べている、先に述べたパシュトゥーンワリーという掟が地元でいかに見られ、取り扱われているのかを冷静に客観的に分析することではないだろうか。これに関してデンマーク人の人類学者クリステンセンはパシュトゥーンワリーを重視する地元部族の人々の言動の方向性を認知していた。著書でいわゆる部族社会の地元にある諺を紹介している。「パシュトゥーンは半分『クルアーン（コーラン）』を使い、半分はパシュトゥーンワリーを使う」（Christensen 1988 : 144）。

パシュトゥーン人は名誉を重んじるとされている（松井 2011 : 489）。地元部族社会の居住者には「誉」と受け止められていること、つまり非常に重視され、実施され、名誉なことから受け止められている、という実態である。このことを松井は「『インデジナス・エティックス』（indigenous ethics）と考えているとみなして間違いない」と断言しているのである。インデジナス・エティックスとはローカルな地元地域社会では倫理となっている、という意味である。さらに、それが住民に肯定的に受け止められているということである。

4) 宗教と地元文化との結びつき

宗教と当地の土地文化との結びつきについては文筆家立花隆も書籍で指摘している。彼は「キリスト教の土着性について」と題して、キリスト教は「その土地の人々と日常生活と密着した、地域すべての文化的伝統、ならびに日常的共同行動と切り離せない」（立花：169）と述べている。イスラームはこの箇所では出てこないが、前後の文脈から彼の思考は仏教、カトリックにもイスラームにもあてはまる宗教全般について述べているものだと考えられる。つまりパシュトゥーン人であるタリバンが、パシュトゥーン居住地域で「誉」とされていることと同じ事を大切なこととして対処していることが多々あるということの

意味は、「土着性」という視点から考えれば納得できることなのである。

つまり、現在、首都カブールでは女性の大学での勉学禁止をはじめとする女性に対する対応が問題視されている暫定政権タリバンであるが、もともとパシュトゥーン文化では同じような対応をしていたことは少なくないのである。

そのため、地方のパシュトゥーン人居住区では特に問題とされていない、とのことなのである。1980年に出版されている写真集 *Afghanistan* (1980) でも、女性たちがブルカとみられる(頭から足元まで覆う長い布)白、灰色、オレンジ色の着物を身に着けている。まだ、タリバンが支配する前のことである。誰に命じられていたのか。もしくは誰からも命じられているものではなく、習慣として身に着けているのか。これについては不明である。しかし、タリバンからの命令ではないのは確かである。

首都カブールでの写真も、1992年でも2002年のカブールでも、また、パキスタンに難民として滞在している女性たちもブルカを着ている。誰からも監視されてはいないにもかかわらず、きれいなブルカを着ているのだ。何故なのか。推測だが、習慣だからか、男性や知らない人に肌を見せることを嫌っているのだろう。2023年のカブールのもしくはアフガニスタン全体の様子は、テレビでは報じられない。報じられるのは、カブール中心であり、他にもカメラはそこそこに行くが、それは全土から考えれば、一端なのである。

もちろん、タリバンは、北部同盟らと対戦し、また2001年から2021年には米国との対戦が継続した。そして米国が21年に撤退した首都カブールでは、以降タリバンが暫定統治者となった。そこで女性のヒジャブ着衣や学校教育からの排除が「問題」とされ、国連はじめ多くの国々は国家とは認めず、その状態が続いているのである。

報道されているように、それがカブールの女性たちを、とりわけ若い女性たちを苦しめているのは一定程度は事実だと考えられる。しかし全土的にすべての女性が苦しめられているのかどうか、また、カブールがそのような状態になった原因は、米国が25年近く紛争との名目で滞在していたため、市内は西洋化が進み、その間に多くの女性が学校に進み、男女共学を享受していたからであろう。これをまず認識しなくてはならない。西洋化の影響および当地文化の排斥か。いずれも悪いことではないのかもしれない、しかし、あり方は他にもあったのではないか。何を是とするのか、何を非とするのか、必ずや一方に是がもしくは非があるのか、その考え方自体に再考の余地があるのかもしれない。

結論

ここまで、タリバンという組織がいかにして、どのような人物によって成り立ったのか、また、その急成長とはどのような要素が絡み合い、国家支配へと結実したのか、その理由について検討してきた。アフガニスタンが、タリバンという組織内で支配的な部族であるパシュトゥーン人の優勢地域であったこと、資金面でパキスタンはじめ複数の国から支援を受けていたこと、軍事訓練も受けていたことなどは、これまでも挙げられてきたことの確認であるが、それ以外の2点が本論文では新たに検討した要素である。

1つは、イスラーム学生でない人も次第に加入してきたことも挙げられるという点である。その結果、多くの地域で戦わずにタリバンによる支配を許し、現在のタリバン支配に至っていると考えられる。

2つ目は、ここで新たな視点として注目し、さらに深く社会に踏み込んで分析がなされたタリバンの文化的側面である。タリバンはパシュトゥーン民族が主であり、その文化的な側面に注目した。つまり、文化的には、パシュトゥーン人地域で「誉」と受け止められているパシュトゥーンワリーがタリバンの主張する姿勢と非常に似ている。とりわけ女性に対する姿勢は同様であるということである。

現在、西側諸国の視点から、政治もしくは紛争を中心に分析されることが多いアフガニスタンであるが、人々の“文化”に基づいた行動などを中心に考える文化人類学的な文化的視点も取り入れ現状について新たな分析をする必要性を感じている。

なぜならば、政治や紛争の背景には社会の成り立ちが必ず深く関係しているからである。それは、並列に結びついているのではなく、政治や紛争の根底にある、と考えるべきではないだろうか。そして、その社会の一辺として土着文化としてのパシュトゥーンワリーが、パシュトゥーン人社会では無視することのできないほど大きな役割を果たしているように、人々の生活に入り込んでいるのである。筆者分析では、人々の心底に深く染み入り行動指針となっているような要素はさらにあり、さらに詳細に結びついていることが文化人類学的には考えられる。そのため、首都カブールではなく、パシュトゥーン人たちの古くからの居住している地域ではパシュトゥーンワリーほか多くの文化的要素は現在も掟として受け入れられ続けていると考えられるのである。

アフガニスタンの首都カブールという大都市の一部かつ米国が駐留していた都市しか注意を向けることができず、部分的な現状報告しかできていない状態のまま、そこだけで得られた結果をもとに国連をはじめ他の西側諸国が援助保留の姿勢を決めてしまっている点は検討し直しが必要なのではないか。ユニバーサルという言葉による「西洋化」ではないのか。

タリバンのスポークスマン、マラヴィ・ワキル・アハマドは語っている。「われわれは、近隣諸国のどこにも干渉したくない。われわれはすべての近隣諸国と良い関係を望む。彼らを理解したいし、彼らにわれわれを理解してもらいたい。」(グッドソン 2001: 171) この言葉の意味を極力東西やグローバルサウス、その他多くの社会の価値観にとらわれず、検証しようとする土地の人々を多面的に検証し考察を進めたい。

本稿が検証してきたことが具体的には、どの視点から、何について述べているのか明確でない部分が少なくないとの指摘も受けている。本稿は政治の問題を政治的な視点のみで分析するのではなく、人々の言動の素地とも言える文化的な視点からも併せて切り込む必要性について考察を重ねたが、筆力不足かつ思考不足である。不明とされた点を明示できるように今後も研究していきたい。

脚注

- 1 オマルの右目損失は、1989 年ごろ政府側の爆撃により負傷したものと高橋は記している。詳細は (2021 : 114)。
- 2 ウルズガン県デラウート出身と高橋は記している (2021 : 113) が、他では確認できず。
- 3 ハーンに車や値上げの交渉をし、最終的にカラシニコフ 10 丁を得て、数名の仲間と独立した (2021 高橋 : 135)。
- 4 他にも諸派の支配者や軍事的支配者などが複数の文献で使われている。正式な定義というものはないが本稿では基本的にはこれらを指して軍閥という言葉を用いる。引用文中 (=軍閥) は筆者記入。
- 5 アメリカの CIA、イギリスの M16 に相当する情報機関。SIS は、英国領インドにある情報機関が、印パ分離独立にあたってインドとパキスタンにそのまま分割相続されたパキスタン側の機構。イギリスはその際、ISI を機構上はパキスタンのものとして設けたが、実質的には自国の情報機関 M16 の補助機関として設置を決めた。ISI は対ソ連戦でのロジスティクスから兵士の補充、訓練、空襲などでも実施しアフガニスタンのムジャヒディーンを支援していたとされるが、パキスタン政府は「もっともらしい否認」を継続し続けている。詳しくは、(多谷 2016 : 125 ; Adamec 1997 : 153)。
- 6 ハリスは、ヘクマティヤルと分かれ、ハリス・イスラーム党を設立したジャーナリスト兼イスラーム教の教師で、保守的なグループのリーダー。
- 7 詳細は (多谷 2016 : 75)。
- 8 パキスタンのムシャラフ大統領は 2000 年 8 月にパキスタンのタリバン支持を表明した。その理由の 1 つに、タリバンが、パキスタンの FATA (連邦直轄部族地域) と NWFP (北西辺境州) に住むパシュトゥーンであることをあげた (グッドソン : 171)。
- 9 赤十字 Reference : V-S-12461-A-01 <https://avarchives.icrc.org/Sound/10548> (2022, 10, 08 アクセス)
- 10 パキスタン・タリバンとは、パキスタン南部の連邦直轄部族地域で活動するパシュトゥーン人の学生運動である。アフガニスタンで戦い、現在アフガニスタン政権を支配しているタリバンとは異なる組織と広く認識されている。

参考文献

- 青木健太 (2022) 『タリバン台頭——混迷のアフガニスタン現代史』岩波新書。
- 高橋博史 (1996) 「新たな紛争の構図 新勢力「タリバーン」の台頭：1995 年のアフガニスタン」『アジア動向年報 1996 年度版』アジア経済研究所。
- (2021) 『破綻の戦略：私のアフガニスタン現代史』白水社。
- 多谷千香子 (2016) 『アフガン・対テロ戦争の研究：タリバンはなぜ復活したのか』岩波書店。
- 立花隆 (2020) 『知の旅は終わらない』文春新書。
- 中田考 (2021) 『タリバン復権の真実』ベストセラーズ。
- 前田耕作、山根聡 (2021) 『アフガニスタン史』河出書房新社。
- 松井健 (2011) 『西南アジアの砂漠文化：生業のエートスから争乱の現在へ』人文書院。
- 山本忠通、内藤正典 (2022) 『アフガニスタンの教訓 挑戦される国際秩序』集英社新書。
- ラシッド、アハメド (2000) 『タリバン』坂井定雄・伊藤力司訳、講談社。
- ラリー・P・グッドソン (2001) 『アフガニスタン：終わりなき争乱の国』原書房。

- Adamec, Ludwig W. (1997) *Historical Dictionary of Afghanistan*, Lanham: Scarecrow Press.
- Barfield, Thomas (2010) *Afghanistan*, Princeton: Princeton University Press.
- Cristensen, Asger (1988) *When Muslim Identity Has Different Meanings*, Ferdinand, Klaus, Mehdi Mozaffari(eds).

